玉葱忌

ハト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
玉葱忌

【Ｎコード】
Ｎ０３３２Ｌ

【作者名】
ハト

【あらすじ】
杉谷という学生が死んだ。
インフルエンザだったらしい。
彼の死に関連する、二人の男のあれこれ。

当日（前書き）

この小説は、フィクションです。
実際の個人、団体、事件等とは一切関係がありません。
これらは全て、作者の想像によるものです。

当日

その日、三西永治は終日家から一歩も出ずに、自宅パソコンでの創作行為に没頭していた。

机の上に置かれた、古びたノートパソコンの周りには、空になった缶コーヒーが４つ。ＢＧＭ代わりに付けっぱなしにしているテレビでは、今猛威を振るっているインフルエンザの特集をやっていてた。しかし先月の年越し前に発症し、既に完治していた永治には無縁の情報で、この番組がやっていると言うことは今は二十二時か、と思うのみである。

彼が下宿をしているアパートは、築三年で比較的新しいはずだが、機械の誤作動なのか、それとも酔った住民の誰かが押したのか、先ほどから鳴り響いている警報のベルに呼応するように、窓がかたかたと震えていた。

その不快な音に顔をしかめつつも、彼は純白のワード画面を、１０．５の明朝体で汚していく。珍しく、自身が慣れ親しんだ掌編以外を書こうと思い立ったのだが、どうも上手く文が進まない。フラグメントの管理や、登場人物の心の動き、そう言ったものを考えるのは不得意なのだ。結果、自分が読み込んだ冒険小説とは似ても似つかない、ギクシャクとした文章に自身の文才のなさを改めて感じた永治である。

自分が部長を務めている文芸部の誰かに教授を仰ごうかとも思うが、どうにも最近の奴らはライトノベルばかりを好む傾向があって、素直に教えを斯う気にはなれない。太宰も芥川も貶すような人間に、良い文章が書けるわけがない、それが永治の持論である。

――そう言えば一人、居た。

永治は自分の一つ下の後輩、ライトノベルも読むが、一番好きな作品は斜陽であると言っていた男を思い出した。まだ、自分たちの作った機関誌に作品を寄稿したことはないものの、何時だったかの

折りに読んだ奴の長編作品は素晴らしかった。教育学部に籍を置く、杉谷という男だ。

杉谷は文学青年という割には、がたいの良い身体をしていて、聞いてみると高校までは柔道をしていたらしい。将来の夢は教員であるらしいが、なるほどと永治はそれに納得している。杉谷は文武両道の好青年である上に、中々に人とのつきあい方を熟知していて、誰とでも親しくなれる人間だった。実際、奇人変人の集まりであるサークルの中で、その全員と親交を結んでいるのは彼ぐらいのものだ。永治自身も、杉谷のことは可愛い後輩として快く思っていた。

永治は、自身のスライド式携帯を取り出すと、杉谷のアドレスを開いてメールを送る。

『長編小説書こうと思うんだけど、なんか上手くいかないんだよね。今度コツ教えてくれんかな？（・ｗ・｜』

そう言う文面を杉谷の携帯に送ると、永治は執筆を中断することにした。

筆が乗らない時に書き進めても仕方がない。そう思ったからだ。彼はワード文章を保存すると、テレビとパソコン両方の電源を落とし、自身も寝床の中に潜り込んだ。

一日中画面とにらみ合っていたせいか、目が重い。不快なベルの音はまだ聞こえるが、直ぐに寝入ることが出来そうだ。

実際、彼は目を閉じてから数分で寝息を立てることになる。

アパートの非常ベルは、結局夜も更けた深夜の三時頃まで鳴りやむことはなかった。

当日（後書き）

赤ちゃんダストがラノベなので、文学ぽいのを一つ。
別種の作品を同時進行すると、相互効果でどちらの執筆速度も上がらないかなぁという浅はかな試みです。
どうかお付き合い下さいませ。

それではご意見ご感想等よろしくお願いいたします。

当日

僕がその日何をしていたかと言えば、朝から高校時代の友人とビールを飲んで、二人でダッチマスターのキャップを開けて、シガリロに染み込んだバニラフレーバーを楽しみながら白石ひよりのＡＶを鑑賞して、その後演劇部に入っている友人とその後輩が一緒にやってきたので、それからはずっと麻雀をやっていた。

「ローン、タンヤオ」

「西栗、お前もうちょっと高い手で上がれないんか」

西栗というのは僕の名字で、この台詞を言った相手は点棒を僕に差し出してくる。つまり、さっきからせこい手で上がり続けている僕、西栗崇に飛びかけの彼はフラストレーションが溜まっているらしかった。

今が夜の十時で、僕たち昭和六十三年生まれのセックスシンボルに筋肉隆々とした男共が劣情をはき出し続ける動画が終わったのは確か夕方五時過ぎだったから、かれこれ五時間ほど続けていることになる。その間に、三回ほどハコを被った彼がイライラするのも判らなくはない。とりあえず謝罪して、次は高い手を狙うと言っておいた。

テレビからは、インフルエンザの特集が聞こえてくる。

「そういや、インフル流行ってるらしいね」

「あれやろ、豚インフル。なんか春先にいった介護実習でなってた人いたわ」

「マジで。それって実習どうなったん」

「夏休みに延長」

「パネェ」

じゃらじゃらと牌を混ぜながら、そんな感じでくっちゃべる。

山を積んでサイコロを振った時、後輩君があくびを一つした。

「先輩すいません。今日早かったんで、これ終わったら抜けますわ」

後輩君はすまなそうに言うが、誰もそれを責めなかった。彼がパン屋でバイトしているのは演劇部の友人から聞いていたし、僕のサークルにいる子も一人、よくパン屋は朝方に仕込みの仕事があって大変だとぼやいていたからだ。

「ええよええよ、気にすんな」

そう言って、僕は手牌を整理する。しかし、彼が抜けるとなると、この卓も今日はこれで解散だろうか。三麻は誰も好きではないのだ。もし続けたいなら、一人呼ばねばならない。僕は知り合いの中から、誰か適当な人物は居ないかと考える。そいつは麻雀を知っていて、下宿生で、京都市内に住んでいて、初対面であろう僕の二人の友人とコミュニケーションをとれる男だ。

ああ、居た。

僕はすぐに、杉谷という後輩を思い出す。僕と同じ文芸部に所属していて、上の条件に該当する好青年だ。友人達にそのことを話すと、彼らも杉谷を呼ぶことに賛成した。

ケータイを取り出し、杉谷のアドレスを選択。

『いま、ダチと麻雀やってんだけど。

君も来ないかい？

場所はウチん家』

そう書いて、送っておいた。もう片方の手で、字牌を選択し、捨てる。

「先輩、それっす」

後輩君が役満を上がった。

その後、いろんな意味で謝りながら帰っていった後輩君を見送り、杉谷からの返信を僕は待っていたが、十一時を過ぎてもメールが来る気配はない。

もしかしたら、もう眠ってしまったのかも知れない。そう思うと電話することは憚られたので、その日はそれで解散となった。

結局、そのメールの返信は、二度と帰ってくることがなかった。

今でも時々思う。
この時電話していれば、彼はまだ生きてたんじゃないかと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0332l/

玉葱忌

2010年10月31日03時38分発行